ようこそ！夢の本棚へ

発行所：松居直コレクションプロジェクト
代　表：金戸 美紀子
事務局：石川県小松市小馬出町10-3
空とこども絵本館
☎ 0761-23-0033
bookrin@city.komatsu.lg.jp

【活動方針】①絵本の楽しさを伝える〈親子読書の奨励〉②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える〈絵本文化の研究〉③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える〈絵本文化の継承〉

『こどもの友』に込めた思い⑤
～私の一番基本的な日本語の体験～

いっぺんで覚えた童謡

◆あるとき母が、古い『コドモノクニ』（1925年11月号）を出してきて白秋の詩を読んでくれたことがあったんです。私は、母が「アメ　アメ　フレフレ　カアサン　ガ　ジャノメデ　オムカヒ　ウレシイナ　ピッチピッチ　チャップチャップ　ランランラン」を読んだ時びっくりしました。ちょっと日本語と思えない。外国語だと私は思った。でも、いっぺんで私は覚えました◆母親が「あなた、次の朝、目を覚まして布団の上で『ピッチピッチ　チャップチャップ　ランランラン』て踊っていたじゃないの」と。体を動かすほどのリズミカルなものが、あの言葉にはあるんです。子どもは聞いただけで済むんじゃなくて、自分なりに言葉で表現できないから体で表現するんですね◆そういった『コドモノクニ』の体験があるものですから、私は耳から聞くこと、そして目でその世界を確かめること、目で絵を読むということを体験したんです◆だから、読む人がどういう読み方をするか、どういう表情で心を込めて読んでくれるか、通り一遍に読むか、そういったことをちゃんと見分けることができるようになった◆私の一番基本的な日本語の体験は「子守唄」と「わらべうた」にありますが、それに「日本の童謡」が追加されることになりました◆こうした絵本体験があって私は、子どもの目で絵本の絵を見るとか、子どもの目で物語の文章を読むとかができるようになっておりました。

講談社『童謡画集』（１９３７年）より
作・川上四郎

余白の中に物語

◆『コドモノクニ』には、たいへん有名な絵描きさんがどんどん出てきて、子どものための挿絵をちゃんと描いていました。そして、その表現の仕方が一人一人違います。線も、形や構図の作り方も違います。色も違います。ある人は細かいところをものすごくよく描くし、ある人は余白をとってもうまく活かす。余白の中に物語を感じるんですから、余白ってのはとっても大切なんです◆特に日本人の美意識は、ヨーロッパの人以上に余白に対して非常に鋭いものがある。これは、中国や韓国、朝鮮の人も持っている◆東アジアには、余白の中にいろんなことを創造していく、余白の見事な表現をしている技術が、ずっーと古代からあるわけです◆絵によって語り方が違う。ある人は非常に線でうまく語るし、ある人は形を作ることが非常にうまい。色彩ってのは、無駄にこの頃の時代の人たちは使わなかったんです。最近の絵本で気になるのは、色を見せようとし過ぎる。色っていうのは、物語を弱めるし、その働きをするのが多いですから、色の使い方はとっても難しいです。線が一番大切なんです◆『鳥獣戯画』っていう最高の作品がありますが、色彩はないんです。全部、線だけ。しかし、それはほんとによく物語を語ります

高山寺『鳥獣人物戯画』甲巻より

子どもの言葉に対する感覚

◆子どもって、すごい観察力を持ってて、すごい聞く力を持ってる。ただ、大人がそれを語らないから、子どもの中にそれが育たないわけですね。だから、絵本を読んでやるときに素晴らしい日本語が使われている文章で表現されてるのを読みますと、子どもの言葉に対する感覚というのは、見事に育って行きます。それが、一番目につくのが、２歳、３歳、４歳。字が読めるようになると、その感覚はちょっとストップしてしまう◆好きな本を繰り返し読んでやっていますと、全部その言葉を食べてしまいます。食べた言葉ってのは、口から出るんですよ（つづく）